里山･ため池・野鳥…OBら多彩な発表

カレッジで生物多様性交流フェアを開催

COP10にちなんだ「生物多様性交流フェアIN　KSC」（シルバーカレッジ主催、グループわ・神戸市環境局など共催）が10月29日、生環コース１～3年や卒業生ら300人が参加して開かれた。午前中の基調講演につづき、午後には６つの分科会で研究発表があり、ロビーでは生き物写真が展示されるなど、カレッジ中が“生物多様性ムード”に包まれた1日となった。（30日に予定されていた六甲エコハイクは、台風14号の接近で中止）

"八百万の神”＝共生の思想

カレッジホールでの基調講演は「生物多様性と私たちのくらし～みんながつながりあって生きている～」のテーマで中瀬勲氏（県立人と自然博物館副館長）が「日本には大昔から“八百万の神”の思想があり、“共生”ということが自然に受け継がれ、芸術や文化の世界でも生かされてきた。生態学からいえば、歴史的なタテの繋がり、同時代の横の繋がりで生物は進化を続け、現在の姿がある。たとえば、コウノトリは多くの生物がいないと生きていけない。野生復帰の試みは、市民や専門家が連携し環境づくりからしなければならない。生物多様性の保全というが、大変な努力が必要なのだ」と熱弁をふるった。

この後、「生物多様性神戸戦略について」と題し、武田義明氏（神戸大大学院教授）が現状を報告。「生物多様性の保全、遺伝資源の利用などをうたった国際条約（1992年）に基づき、95年に「国家戦略」がたてられた。この中で、地方自治体・企業・国民の参画が求められ、各自治体でも「戦略」作りが始まり、現在、兵庫県・名古屋市など11自治体で制定されている。神戸市も六甲の自然を市民の共有財産として守ろうと、行動計画を策定中だ」と述べた。

卒業生らが研究・体験報告

分科会では食と農、野鳥などカレッジ卒業生が取り組んでいる身近な研究について発表があった。分科会の後、懇親交流会が開かれ、各ナビゲーターが分科会の内容を報告。参加者から「生物多様性について多角的に学ぶことができた。今後の研究にいかしたい」などと感想が述べられた。最後に、交流フェアの責任者である北尾進氏（生環コーディネーター）が「COP10の年に、皆さんの協力を得て意義ある催しをすることができた。まずまず成功だったと思う。この経験を生環コースのカリキュラムに生かしたい」と締めくくった。この席で、第６分科会の発表者・西谷氏から「空と海の約束」の紙芝居2セットがグループわに寄贈され、長谷川・副理事長は「学習支援活動で子供たちに見せたい」とお礼を述べた。

【分科会の発表内容】（　）内は参加数。

▼セッション①のテーマは「里山保全と活動」（62人）。司会は谷口博氏（生環サポーター）。大谷敏行氏（生環11）は、篠山市大山新地区でH15年から始めた里山整備の活動ぶりを発表。道満俊徳氏（生環13）は、里山和楽会が北区山田町の「かがやきの森」で進めている里山活動を紹介した。谷口氏からは「グループわが5年がかりで取り組むことになった村内の里山整備について、ぜひ参加してほしい」との呼びかけがあった。

▼セッション②は「食と農」（93人）。司会は土井敏男氏（環境局）が務め、土井氏と瓜生隆宏氏（県土地改良事務所）、辻村允夫氏（生環８）が、「農業が生物多様性を支えている」との観点から、農業から得られる多くの恵み、農産物の生産性や経済的側面について発表した。小川氏は、小川の生き物からみた食物連鎖、環境保全について語った。

▼セッション③は「野鳥の保護」（28人）で井上清仁氏（野鳥の会ひょうご）が司会。茅中英一氏（生環11）は、しあわせの村内で行なっている巣箱を利用した野鳥の保護活動について発表。北野光良氏（市立湊川中学校）は、コウノトリやトキなど厳しい状況に置かれている鳥について語った。